

すいせい
彗星 X

黒川 文



目次

1. 2013年の秋	
1. 2013年の秋	3
2. 2017年の春	
2. 2017年の春	9

1. 2013年の秋

1. 2013年の秋

11月21日木曜日。午後から高山は天文部の公式活動で授業を抜けることになった。運動部の試合などで認められている公休というやつだ。文化部では珍しいが、彗星の観察のため今回だけ特別に認められた。

顧問教師の浅井由希子先生の運転するワンボックスカーに部員三人と器材を積み込み、兵庫県北部にある神鍋高原キャンプ場に着いた。部員は二年の梶本と矢野、そして一年の高山の三人だけの小さな部だった。

「高山あ、望遠鏡とパソコンは俺らが運ぶから、お前はテントを持ってこい」

と、二年の梶本が言った。重いものを押しつけられた感があったが、望遠鏡とパソコンは部の貴重品であるし精密機器でもある。そんな大切なものを一年の自分には任せられないと判断したのだろう。高山がクルマから降ろされたテントの入った袋を見るとかなり重そうだった。登山用の軽量のものとは異なり、望遠鏡とパソコンを万が一の雨から守るためのレジャー用仕様のものだった。高山は文句を言わず背中に担ぎ上げ、駐車場からキャンプ場に伸びる登り路を歩いた。

「おう、持って来たな。ここへ設営しよう」

キャンプ場の使用届は浅井先生がしてくれている。先輩たちは平坦な場所に望遠鏡を乗せる三脚を設置し、その横に荷物を積み上げていた。この横にテントを設営し、中に望遠鏡につけたカメラからの画像を表示させるためのパソコンを設置する。エンケ彗星は明るさ6等級で、街の光の海の中では観察がやや難しい。それで、せっかくだからと山奥のキャンプ場まで来たのだった。まだ明るかったが高山は西の空を見つめた。

テントの設営が終わると梶谷と矢野は炊事の準備を始めた。レトルト食品とカップ麺だけのものだ。今日の夕食と夜食。明日の朝食が兼ねられている。

カセットコンロをテーブルの上に出し、登山用の鍋《コッヘル》を載せた。

「高山あ！ 水！」

梶谷は叫んだ。

「ああ……」

これって、自分の役割だっけと、疑問に思いつつも、ポリタンクを手にし、キャンプ場の水くみ場に歩いて行った。

その時にたまたまこのキャンプ場に来ていた女子生徒の一団と遭遇した。何だか華やかな感じがした。部に女子がいるのといかないのでは雰囲気がまるで違う。でも、高山は女子が苦手だった。小学校高学年のときから女子とは喋ったこともない。もはや、どう接していいのかもよくわからなかった。

その女子たちの一人に高山は目を奪われた。小柄でスタイルがよく、色白で気の強そうな眉に知的な黒い瞳をしているのが特徴の目立つ美少女だった。ぼうっとなりつつも彼女の作業している光景を眺めていると目が合ってしまった。

高山はその途端、動揺し、目を伏せてしまった。もし、視線に風圧のような力が作用するとしたら、こういうのをそう言うのだろう。まさしくオーラみたいなものを感じた。

そして、そそくさとポリタンクを持ち、その場を立ち去った。後になり、もっと彼女のすることを見つめておけばよかったと悔やんだ。

彼女のことをもっと知りたい。

純粹にそう思った。

好き、だとかそういう感情ではないとそのとき自分では思った。

彼女の着ているのはどこかの私立の高校のジャージの様に見えた。

それ以外にまるで手懸かりはなかった。

小粋なデザインに彼女が着ているからであろうか、とてもクールに見える色合い。そして、胸元に校章の様な刺繍が施してあった。それも、自分の高校の「葉っぱの中心に高の字」のダサイマークとは違い、ヨーロッパ王室の紋章みたいな格好いいエンブレムがあしらわれていた。もしかしたらミッション系の学校かも知れない。

どこの高校だろう？

高山は水くみ場で汲んだポリタンクいっぱいの水を持ち、自分でも茫然とした顔だとわかるくらい抜けた表情のまま、設営したテントに戻って来た。

「おい、高山あ！ 何いっぱい汲んで来たんだよ。半分でいいって言ったじゃないか」

梶本が責めるでもない口調で指摘した。

「あ、ああ、そうでした。……はは、重かったっす」

高山は頭を掻いた。ここまでの登り坂の途中、タンクいっぱいの水を重いとも感じなかった。

やがて日が沈み、辺りが暗くなってきた。都会の暗闇とはまた違った自然の暗さというものがやって来た。——夜ってこんなに暗かったっけ。と高山は思った。その分、普

段の高校の校舎屋上のドームから見る星空より数百倍も空気が澄んでいるように感じた。いや、それだけではない。都会では地上の光が半端なく多いのだ。夜景がきれいなのと引き替えにもはや「光害」と言っていいほどの光が地上を埋め尽くしているのだ。

そして、ここにはその光がまるでなかった。普通なら見えないはずの等級の星まできれいに見えた。

先輩二人は目的であるエンケ彗星の姿を口径150ミリの反射望遠鏡にリングを通して取り付けたデジタルカメラで何枚も写真に収めていた。

観測を夜半過ぎまで行ない、明け方まで、仮眠をとり。朝5時に先生の号令で起床し、ラジオ体操をして、軽く朝食を摂った後、またクルマに乗り込み学校へと戻った。昼からの授業には参加しなくてはならなかった。

先輩の梶本と矢野がクルマの中で「今年のジョガクエン、ものすごい美人がいたなあ」と話しているのを耳にする。

高山はあの子のことだと直感した。他に男子生徒の注目を浴びるほどの美人はいなかったはずだ。少なくとも高山に取り彼女は女神様に匹敵していた。

家に帰着した高山は星の写真もそこそこに、SNSやブログなどで「ジョガクエン」とやらの情報を集めようとした。

しかし、まるで手懸かりにはならなかった。だからと言って、「実は……」などと先輩に聞くのも恥ずかしかった。

あの美少女はどこ誰なんだろう。

やがて、二年生になり、三年生になっても、星空を見る度、あの美少女のことを思い浮かべた。

「もう一度会いたい……」

梶本と矢野が言っていた「ジョガクエン」のことも、彼らも卒業してしまい、結局聞けずじまいだった。

高山は、あの夜撮影したエンケ彗星の写真を見ながら、悶々とした日々を漂い続けた。

2. 2017年の春

2. 2017年の春

そして月日は流れ、高山は高校を卒業し、受験にも失敗して予備校に通い、一浪の末に、地元のみなと大学教育学部に入った。

一浪したのに懲りて、今度は勉強に専念するぞと決意していたのだが、人のよさげな先輩からの勧誘に負けて、また天文部に入ってしまったのだった。やっぱり星空を見るのが好きなのだ。中堅校である鈴蘭台北から公立大に進むのは簡単ではなかった。卒業時に受けた大学とは違っていたが、ここならば現役で入れたかどうかと言うと、それは疑問であった。もっとも、あの高校からも優秀な生徒は国立大に行っていたので、やっぱり、自分の努力不足の感は否めないでいる。

天文部三年生の先輩、月見まどかが「今年は見れるかなあ？」とつぶやいた。彼女は名前の通り円満な人柄で女子アレルギーの気がある高山にとっても話しやすかった。

「なんすか？」

高山が聞くと、3. 30年に一度地球に接近する彗星があるという。高山も覚えがあった。それを見るためにわざわざ顧問教師がクルマを出してまで山奥のキャンプ場まで行ったのだ。エンケ彗星それ以外にあり得なかった。そして、忘れもしないあの思い出の美少女とたった一度だけ出会えたきっかけでもあった。

「前の最接近のとき、神鍋キャンプ場で観測会をやりましたよ」

「そうなんだ。いいなあ」

「行きませんか？」

「そうねえ」

大学天文部の望遠鏡のあるドームは都市部に近く、あんまり条件はよくない。街の光が多すぎて暗い星はあんまり見えないのだ。「あの辺りだったら日本海側よね。空気も澄んできれいかも。大槻君クルマ出せるかな？」

「いいですよ」

免許を持っている先輩、二年の大槻がレンタカーを手配した。7人乗りのワンボックスカーだ。それに望遠鏡とパソコンとテントを積み込み5月10日水曜日の午後から出発することにした。

高山は高一の秋を思い出していた。あのときと同じだ。テントを設営し、望遠鏡を設置し、夜間の観測に備えてテントの準備をした。前回と違うのは女子部員の月見がいて、

夜食の準備をしてくれるということだった。でも、ポリタンクへの水くみなど、力仕事は高山が進んで行なった。

キャンプ場の水くみ場でポリタンクに水を入れ始めると隣に女子大生らしき一団を認めた。高山は少しガードを上げた。やっぱり苦手なものは苦手である。そうそうに退散しようと、タンクにキャップをして、頭を上げたとき、同じように水くみに来ている女子大生の中の一人が、あの知的な黒い瞳の少女だということに気付いた。あのときより数段大人びてはいたものの、身体にまとっているオーラはあのとき、あの場で感じたものとそっくりそのままだった。

「あっ」

高山は思わず口にし、すると、彼女はこちらを向いた。不思議そうな目で。

またもや、心臓がばくばくと鼓動してきた。

声を掛けたい。……でも出来なかった。先輩の月見とは平気で話せるのに、彼女の目を見た途端、息も出来なくなってしまうのだ。またもや、そそくさとタンクを抱えて自分のテントの元に小走りで帰った。

やがて夜が更け、満天の星空が広がった。

高山は望遠鏡をのぞき込み、彗星の輝きを目にした。彼女も思いを馳せているに違いない。ただそのことだけに満足するのだった。ただただ彗星の周期が3年であることに感謝した。ハレー彗星みたいに75年も掛かっているのは、多分、彼女とは二度とお目にかかれなかつただろう。そして、3年に一度のチャンスだからこそ、こうやって、学校のドームからではなく山奥のキャンプ場にまでやって来ているのだ。

彼女は今どこの大学に通っているのだろうか？

今夜、観測した彗星の画像をSNSかブログにアップしないだろうか？

いや、むしろ、こんな不器用な自分を変えたい。そう、星空に願うのだった。

深夜0時を回った頃、パソコンの画面と望遠鏡を交互に覗いていた高山の所に月見がやって来た。もう、夜食の時間なのだろうか？

「王子様！」

「はい？」

月見の上機嫌な声に高山は怪訝な声で返事した。親しい間柄だが、冗談など言ったことはなかったのだ。

「お姫様をお連れしましたわ」

高山が振り向くと、彼女の背後に誰かが立っていた。小柄な女性の様だった。「じゃあ、後は若い人だけで……うふふ」と、意味深な台詞を残し、結局夜食も持ってこずに行ってしまった。

「こんばんは。星がきれいですね」

その女性はそう言った。きれいで上品な声だった。高山はあっと思った。彼女だ。彼女に違いない。

「高山裕《ゆたか》……君、だったっけ？」

「え、どうして僕の名前を……ああ、月見さんから聞いたんですね」

薄暗がりの中、彼女の漆黒の瞳はキラリと光った。

「覚えてないか。……高山君、山の街東小学校4年3組だったでしょう？ 担任は東原先生。高山君は目が悪くていつも前の方に座っていたよね」

「え？ どうしてそんなことを知っているのですか」

「同じクラスだった佐山薫です。久しぶり！」

「え、ええーっ！」

高山は完全に彼女の記憶がなかった。4年生の後半くらいから女子とは会話をしたことがないはずだった。特に彼女の様な目立つグループの子たちとはだ。目立つグループということを知っていた？ 自分が？ なぜ？ その答えはさっき彼女が述べた通りだった。同じクラスにいたからだった。そこまで言われ、高山の微かな記憶が甦ってきたように感じた。いや、甦ったと言うよりも、彼女の出現でショックのあまり記憶が混乱し、ありもしない記憶が創作されたのかも知れなかった。

「待って、佐山さん。えーっと、どうして僕の記憶にないの？ 君はそんなに目立つのに」

「多分、三学期を待たずに転校してしまったからじゃないかしら。わたし、中学受験するために、4年生の3学期から西宮市の学園に近いところに引っ越したの。女の子のお友達とはずっと連絡を取っていたんだけど、男子とは特にしてないし」

「学園って、あのジョガクエンっていう？」

「神戸女学園附属中学。今は大学の国際教養学部の二回生よ」

「ええーっ！」高山は完全に混乱しつつも、ここ3年の間途切れていた情報がつながるのを感じた。

そして、彼女のことがわからなかったのは、彼女が転校したせいではないことは、高山にしかわからなかった。

彼女があまりに変わってしまっていたからだ。平凡な女の子の一人に過ぎなかった4年3組の女子児童は、高校生になり成長し、顔つき、スタイル共に美しく変貌を遂げ、本人の気付かないうちにまるで別人になっていたのだ。女性の認識機能は男性のそれより上回ると言うが、まさにそれを地で行っていた。高山は佐山薫を認知出来なかったが、佐山薫は月見のお節介もあったのかも知れなかったが、高山のことをたやすく認知することが出来たのだ。多分、中学受験という大きなハードルを自力で乗り越えることで彼女の知性的な美しさに光が当たり、より一層研ぎ澄まされたと言うべきだろう。

「覚えていなくてごめんなさい。佐山さんのこと……」

「ううん。いいの。わたしも、水くみ場で目が合ったとき、どこかで会ったことがある顔だなあと思ったくらいで、すぐにはわからなかったもの。高山君もものすごく変わったと思う」

「ずっと星に祈りを捧げていたんだ……その、会いたい人に会えますようにと」
「星ってエンケ彗星のこと？ だったらすごい偶然。もしかして、前の最接近のときも、このキャンプ場にいたの？」
「うん。多分そのとき、君に出会って……いや、再会という意味だけど……出会ってなければ、ここまで天文部にこだわっていなかったと思う。あの、もしよかったら……」
「なあに？」
「もし、よかったらアドレス交換出来ないかな？ 星の写真も送りたいし……もし、嫌じゃなかったらだけど」
「うふふ、いいよ」
彼女は手を後ろ手に組み、にっこりと微笑んだ。 了

彗星X

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
